厚　生　省

障害保健福祉総合研究事業

アルコール依存症の疫学と予防に関する総合的研究

（H10－障害－007）

平成10年度研究報告書

白　倉　班

主任研究者　白　倉　克　之

平成11年3月

厚　生　省

障害保健福祉総合研究事業

アルコール依存症の疫学と予防に関する総合的研究

（H10－障害－007）

平成10年度研究報告書

白　倉　班

主任研究者　白　倉　克　之

平成11年3月

目　　次

1．アルコール依存症の疫学と予防に関する総合的研究 …… 1

主任研究者　白　倉　克　之（国立療養所久里浜病院）

2．未成年者の飲酒関連問題の長期経過に関する研究 …… 7

分担研究者　白　倉　克　之（国立療養所久里浜病院）

研究協力者　鈴　木　健　二（国立療養所久里浜病院）

3．高齢者のアルコール依存症スクリーニングテスト（KAST-G）の開発に関する研究 …… 19

分担研究者　白　倉　克　之（国立療養所久里浜病院）

研究協力者　松　下　幸　生（国立療養所久里浜病院）

4．飲酒習慣と健康に関する疫学研究 …… 25

分担研究者　角　田　　透（杏林大学医学部衛生学教室）

5．否認スケールの開発に関する研究 …… 29

分担研究者　猪　野　亜　朗（三重県立高茶屋病院）

6．一般住民における問題飲酒と実態及びその長期予後に関する研究 …… 41

分担研究者　杠　　岳　文（国立肥前療養所神経科）

研究協力者　比江島　誠　人（国立肥前療養所臨床研究部）

7．職場における問題飲酒に対するBrief interventionの効果に関する検討 …… 57

分担研究者　廣　　尚　典（日本鋼管病院鶴見保健センター）

厚生科学研究費補助金（障害保健福祉総合研究事業）
総括研究報告書

アルコール依存症の疫学と予防に関する総合的研究

主任研究者　白倉 克之　国立療養所久里浜病院長

研究要旨　本研究は、互いに独立したアルコール依存症の疫学に関する３研究、予防に関する研究３研究からなる。疫学に関する研究（１－３）および予防に関する研究（４－６）の概要は以下の通りである。１）佐賀県下某村の一般住民に対する飲酒パターン・アルコール関連問題の調査を行い、飲酒の健康や社会生活におよぼす影響を評価することを目的とする。今年度は調査票を作成し、予備調査を行なった。その結果、調査票の妥当性が明らかになった（杠）。２）沖縄県佐敷町における経年的な調査研究の資料から飲酒習慣と住民検診時の循環器病関連の指標との関連を評価した。少量飲酒者は非飲酒者に比べて循環器検査成績が相対的に良好であることが示唆された（角田）。３）神奈川県下某市の４中学校の生徒を対象に、飲酒行動に関するコーホート研究を行なった。今年度は調査開始時の中学生及び両親の飲酒行動、飲酒に関する認識等についての結果をまとめた。対象とした中学生の飲酒水準はまだ低かったが、彼らの飲酒に対する親の認識は低く、子供の飲酒群は既に一定の傾向を持っていた（白倉、鈴木）。４）高齢アルコール依存症のスクリーニングテストを開発するために、健常高齢者とアルコール依存症者とに 78 項目の自記式調査を行なった。予備解析では、ほとんどすべての質問項目で２群をよく弁別できた（白倉、樋口、松下）。５）アルコール依存症に対する否認スケールを開発するために、予備調査を実施し、その結果をもとに本調査票（患者用、家族用等）を作成して調査に入った。予備調査の結果は、一定の Cut-off 点で治療初期群と治療進行群とを弁別できることが示唆された（猪野）。６）職域における問題飲酒者に対して、３つの異なる Brief intervention 法（個別面接、社内メール、集団教育）を施行してその効果を検討した。その結果、個別面接法が最も優れていることが示唆された（廣）。

分担研究者

白倉克之	国立療養所久里浜病院長
杠　岳文	国立肥前療養所神経科医長
角田　透	杏林大学医学部衛生学教室助教授
猪野亜朗	三重県立高茶屋病院診療科医長
廣　尚典	日本鋼管病院鶴見保健センター長

研究協力者

樋口　進	国立療養所久里浜病院臨床研究部長
鈴木健二	国立療養所久里浜病院精神科医長
松下幸生	国立療養所久里浜病院精神科医長

本研究は、アルコール依存症の疫学に関する３研究、予防に関する３研究からなる。互いに独立した研究のために、各セクションにおいても、区別して記載する必要がある。以下のセクションにおいて、各番号は以下の研究課題を表すものとする。

1）一般住民における問題飲酒の実態及び長期予後に関する研究（杠）
2）飲酒習慣と健康に関する疫学研究（角田）
3）未成年者の飲酒関連問題の長期経過に関する研究（白倉、鈴木）
4）高齢者のアルコール依存症スクリーニングテスト（KAST-G）の開発に関する研究（白倉、樋口、松下）
5）否認スケールの開発に関する研究（猪野）
6）職場における問題飲酒に対する Brief intervention の効果に関する研究（廣）

A．研究目的

1）1984 年に実施された日米共同疫学調査以来、我が国では一般人口の問題飲酒者に関する研究はほとんどない。本研究は、一般人口集団の飲酒パターン・アルコール関連問題の実態把握と、調査で同定した問題飲酒者を長期追跡し、飲酒の健康・社会生活に及ぼす影響を評価することを目標にしている。2）一般人口に対する健康診断結果を利用して、飲酒習慣が縦断的に、循環器関連の健康障害にどのように関連しているか評価する。3）未成年者の飲酒行動を長期に追跡していくことにより、年齢とともに飲酒の増大していく状況や問題飲酒の出現状況をとらえ、飲酒の促進因子を抽出する。4）最近増加している高齢者のアルコール依存症者を同定する補助手段としてのスクリーニングテストを開発する。これにより、彼らの飲酒問題に対して効果的に介入できる。5）飲酒問題への否認、アルコール依存症への否認を客観的に評価できるスケールを開発する。これにより、治療予後の判定、治療課題の設定が可能となる。6）職場において、産業医や産業看護職が問題飲酒者に対する効果的な Brief intervention を行なうためのマニュアルを作成することを目標にしている。

B．研究方法

1）飲酒パターン・飲酒問題の評価ができるような自記式調査票を作成した（分担研究報告書参照）。この調査票には、アルコール関連問題の評価も可能なように、AUDIT、CAGE、KAST の質問項目も取り入れられている。今年度は調査票の妥当性等を検討すべく、某病院職員 157 名、離脱期をすぎたアルコール依存症者 78 名に対して予備調査を行なった。2）昭和 61 年沖縄県佐敷町の住民検診で飲酒パターンについて回答した者の中で、その後の 10 年間に少なくとも３回住民検診を受けている者を対象にした。その数は男性 76 名、女性 169 名、合計 245 名であった。３回の検診で、血圧、血清脂質、心電図の結果を評価し、飲酒パターンとの関連を検討した。実際には、血圧、血中脂質、心電図の検査成績の判定を数値化し、この合計を従属変数にして、飲酒、喫煙、性別を独立変数とし、年齢を共変量に多変量解析を行なった。3）神奈川県某市の中学生に対して飲酒行動の追跡調査を行なっている。当初の調査対象者は 1,238 名であった。これらの者に郵送法で調査参加の依頼をした所、802 名が参加に同意し、エントリーのための調査に記入して返送してきた。この

調査は、中学生が22項目、親が15項目からなる自記式調査である。内容は本人および両親の飲酒行動、飲酒に対する認識等に関するものである。対象802のうち、子供の797通、親の784通が有効で、今年度はこれを解析した。なお、本人の飲酒の追跡は既に2年目を迎えている。4）高齢者のアルコール依存症スクリーニングテストを作成する目的で、高齢者の飲酒問題に関連する78項目の調査票を作成し、一般高齢者（老人クラブ会員）1,104名、アルコール依存症者60名に実施した。今年度は、両群間で調査項目の回答について比較検討した。5）68項目からなるアルコール依存症に対する否認スケールの原版を作成し、入院直後の治療初期群13名と断酒会員で治療の進行している群9名に対して、予備調査を実施した。その結果から、質問数を減らすなどして本調査用の質問票を作成し、3月1日から調査を開始している。6）某職域の健康診断で、問題飲酒者（AUDIT 10点以上の者かγ-GTP 100U/L以上の者）98名を抽出した。これを3群に分け、それぞれ個別面接、社内メール、小集団教育という手段でBrief intervention を行なった。内容は3群とも同一で、FRAMES 法に従った。介入実施後6ヶ月後に、飲酒状況につき質問紙調査を実施し、その効果を比較検討した。

C．結果および考察

1）某病院職員の結果では、AUDIT10点以上の者が、男性の31.0%、女性の5.8%に存在した。この Cut-off 点を使うとその前後でγ-GTP 値のみならず MCV 値の平均値にも有意な差を認めた。飲酒量についても、γ-GTP 値と有意な相関を認めた。アルコール依存症群では、AUDIT の平均値が24点で、10点以上が97.4%存在した。これらの結果から調査票の妥当性が確認された。AUDIT の Cut-off 点は、調査により操作的に使われるが、本調査では10点が適当であることが示唆された。2）対象者の中で、「飲まない」と回答した群が「飲む」と回答した群に比べて、循環器関連障害の健康状態の評価が悪かった。「飲酒あり」の詳細については不明であるが、分担研究者の問診時の印象で大量飲酒者は少なく、今回の結果は、少量の飲酒は循環器に対してよい影響があると解釈された。しかし、方法論上の問題点が多く（例えば、評価年が互いに異なる、対象者が昭和61年の飲酒習慣をそのまま続けているという保証はない等）今後検討されるべき課題は多い。3）対象中学生の飲酒経験者は46%、飲酒頻度は月1回以上の飲酒者は全体の5.6%と全国平均より低く、1回当たりの飲酒量もコップに3杯以上の者は1.1%と少なかった。親の子供の飲酒に関する認知は低く、親の80%は自分の子供は飲んでいないと考えていた。QFスケールで飲酒問題を持つと判定された群はそうでない群に比べて、自分達の飲酒を肯定する傾向が強く、親の飲酒問題も多く認めらた。対象とした中学生の飲酒はまだ低い段階にあったが、それでも子供の飲酒に対する親の認知は低く、子供の飲酒群は一定の傾向を持っていることが明らかになった。今後、追跡調査結果が順次解析されていくが、飲酒を促進している要因の同定などが期待される。4）以前からの継続研究である。今年度は、高齢アルコール依存症者の調査を終了し、対象者数が60名になった。正常者との間で判別分析を行ない、2群をもっとも高い敏感度、特異度で弁別しうる項目を選定する作業に入る前に、今年度

は個々の質問項目について２群間で比較検討した（質問項目の詳細については、分担報告書参照）。その結果、４つの質問項目を除いたすべての項目で２群間に有意差を認めた。調査票に使用した質問の妥当性は今年の解析で明らかになった。来年度は、判別分析を行なう予定である。

５）予備調査から、68 項目からなる患者用否認スケールの原版でも、一定の Cut-off 点を用いて、治療初期群（否認レベルが高いと考えられる群）と断酒会員（否認レベルが低いと考えられる群）とある程度弁別できることが明らかになった。この予備調査から、質問項目を更に減らして、最終的に本調査用の質問票を作成した。分担研究報告書からわかるように、それは、患者用、家族用、治療者用、およびインターベンション評価用からなる。スケールの作成に必要な本格的な調査は３月から既に始まっている。

６）３種類の Brief intervention 方法、すなわち個別面接、社内メール、小集団教育の６ヶ月後の評価では、個別面接が節酒の実施率とその効果について最もよかった。また、年齢別に見ると、50 歳代に限っては、小集団教育が最もよかった。マニュアル作成のためには、今後さらに症例数を増やして多面的に解析する必要がある。しかし、今年度の結果からは、Brief intervention の方法として、個別面接が最も優れていることが示唆された。

D．結論

分担研究には、今年度からあらたに開始された研究、既に開始されていた継続研究が含まれ、その進捗状況は一様でない。しかし、進捗のレベルは異なっていても、各分担研究が今年度の研究である一定の成果を得ていることは明らかである。一般住民の飲酒実態に関する研究、否認スケールの開発に関する研究は、新規研究であり、今年度は調査票の妥当性を検討したが、何れも良好な結果が得られている。Brief intervention に関する研究も新規研究であったが、個別面接の有効性を示す結果を示した。継続研究ではいずれも有意義な結果を既に出している。さらに検討が必要ではあるが、住民検診に関する研究では、（少量）飲酒が循環器関連障害の抑制を示唆する結果を示した。未成年者の飲酒行動に関するコーホート研究では、我が国で初めて子供と親をペアーで調査し、子供と親の認識の差、親の飲酒が子供の飲酒に影響を与える点など、興味深いデータを示してくれた。高齢者のアルコール依存症スクリーニングテストも、判別分析が可能な段階まで到達していた。本研究班は、今年度新たに立ち上げられたために、分担研究のなかで当初の目的を達成した研究はもちろんない。しかし、今年度の研究成果から来年度以降、内容の優れた研究成果が強く期待される。

E．研究成果

１．論文発表

１）廣 尚典、樋口 進: 職場のアルコール依存症. 臨床精神医学講座, 第 18 巻家庭・学校・職場・地域の精神保健. 中山書店, 東京, pp.389-397, 1998.

２）Yao H, Yuzuriha T, et al.: Decreased plasma tryptophan associated with deep white matter lesions in elderly subjects. J Neurol Neurosurg Psychiat 66:100-103, 1999.

２．学会発表

１）廣 尚典: 職場におけるアルコール関

連問題の Screening と Brief intervention. 第 33 回日本アルコール・薬物医学会総会, 神戸, 1998 年 8 月.

F. 知的所有権の取得状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

未成年者の飲酒関連問題の長期経過に関する研究

分担研究者　　白倉博之　国立療養所久里浜病院　院長

研究協力者　　鈴木健二　　国立療養所久里浜病院　精神科医長

研究要旨：わが国の未成年者の飲酒問題についての研究はまだ緒についたばかりであり、未成年者の飲酒実態やその社会的要因についての研究が横断的調査によってなされているにすぎない。この研究は、未成年者の飲酒状態をその社会的要因も含めて長期的に追跡することにより、未成年者の飲酒促進要因を分析し、更に未成年者の中のリスクの高い飲酒をしている者たちが、将来アルコール依存症を発症していくのかどうかを明らかにしたいと考えた。1997年において、教育委員会の協力を得て、神奈川県のひとつの自治体の４つの中学校の1238名の生徒に、本人及び保護者の長期調査の契約書と第１年度の調査用紙を配付し、郵送によって調査を開始した。調査への同意は802 名から得られた。
今年度は、第１年度の1997年の中学生とその親の調査の分析による長期追跡群の基本性格を明らかにした。対象は中学１～３年生の男女であり、家庭は３世代家族が多く、親の職業も第１次産業が11% と多い。飲酒経験者は46% 、飲酒頻度は月に１回以上の飲酒者は全体の5.6%と全国平均より低く、１回あたりの飲酒量もコップに３杯以上の者は1.1%と少なく、飲酒経験者の多くは家族と飲んでいた。しかし親の側の子どもの飲酒に対する認知は低く、親の80% は自分の子どもは飲んでいないと考えており、自分の子どもが月に１回以上飲酒していると回答した親は、わずかに1.4%であった。逆に親の飲酒については親の回答と子どもの回答はよく一致していた。父親の19% 、母親の0.8%は医師から飲酒を控えるように指示された経験を持っていた。子どもの飲酒状態をＱＦスケールによって分類すると、飲酒群は9.3%、問題飲酒群は0.1%であり、この２つのグループを飲酒群として、正常群(90.6%) と比較すると、飲酒群は未成年者飲酒禁止法を「個人の自由」として否定する意見が多く、友達から飲酒を誘われた時断れないと考えている者が多く、親から飲酒を勧められた経験を持つ者が多く、父親の飲酒も多く、親に悩みごとを相談することが少なく、母親が仕事を持っている家庭が多く、医師から節酒を勧告されたことのある父親を持っていることが多かった。この結果は、対象の中学生の飲酒はまだ低い水準にあったが、それでも子どもの飲酒に対する親の認知は低く、子どもの飲酒群はすでに一定の傾向を持っていることが明らかになった。調査は第２年度の１９９８年が終了しており、来年度は、子どもの飲酒の増加とその要因の分析を行う。

Ａ．研究目的

筆者らは１９９０～１９９２年において、高校生１４０００人と中学生３０００人の飲酒問題に関する調査を行い、子どもたちの飲酒が大人たちの予測を越えて拡がっていることを明らかにした。また中学生・高校生の中にリスクの高い飲酒をしている問題飲酒群が存在していることも明らかにした。更に高校生の飲酒状態と社会的要因の分析を行い、アルコール問題を持つ親を持つ高校生に問題飲酒群が多いこと、高校生が広く酒の自動販売機を利用していること、酒の自動販売機を利用している高校生の多くは問題飲酒群であることなどを分析した。

筆者は１９９６年に国立公衆衛生院が行った未成年者の飲酒問題についてのわが国初めての全国調査にも共同研究者として参加し、中学生・高校生の飲酒と生活意識について明らかにした。

未成年者の飲酒についてその他の調査も行われているが、いずれの調査も調査時点での飲酒状態を分析する横断的な調査である。一方欧米では未成年者の飲酒につての長期間の追跡調査が数多くなされており、未成年における大量飲酒が早期のアルコール依存症の発症に至ることが明らかにされている。

この研究はわが国における初めての未成年者の飲酒問題の長期の追跡調査を計画したものである。１０年間の追跡調査の契約をした中学生に対し、毎年飲酒関連問題の調査を続け、年齢と共に飲酒が増大していく流れを捕らえ、飲酒促進因子を抽出し、問題飲酒群が早期のアルコール依存症の予備軍なのかどうかも明らかにしたいと考えた。本年度の研究は、初年度の調査結果をまとめ、対象群の飲酒状態と社会的因子を分析した。

B．研究方法

調査対象は、神奈川県の南部のひとつの市の全部の中学校４校の中学生である。市の教育委員会と学校長会の協力で調査は開始された。初年度の調査は１９９７年２～７月に行った。まず筆者と研究協力者が各中学校ごとに生徒たちにアルコール健康教育を行い、その日に生徒たちに生徒自身のアンケートと、保護者の調査への同意書と親のアンケートを持ち帰らせ、郵送で筆者宛にアンケートを返送してもらった。学校によっては教師たちが回答率を上げるために、封をした回答をクラスごとに回収し、それを筆者宛に届けてくれた。調査に協力した生徒には協力費として千円の図書券を返送した。

調査期間に４つの中学校に在籍していた生徒は1945名であったが、調査対象となった生徒は、学校によっては１～２学年のみにとどまったところもあったので、調査対象となった中学生は1238名であった。そのうち、調査契約書が返送されてきたのは802 通であった。したがって調査参加率64.8% であった。802 通の中で、飲酒状態の記入が不十分な回答は無効回答とみなしたので、有効回答は生徒が797 通、親が784 通であった。

調査内容は、生徒に対して、子ども自身の飲酒状態や学校生活、親の飲酒についての質問など22項目の質問であり、親に対しては、家族構成、自分の子どもの飲酒状態の評価、自分の飲酒状態などの１５項目の質問であった。なお記名式の調査であるので、子どもの回答と親の回答とは１対１の対応となっている。

この報告は、初年度の１９９７年の調査の生徒本人の回答と親の回答の分析を行った。

C．研究結果

表１に対象の概況を示した。平均年齢は13.5歳、女子が男子より多く、１年生が多く、３年生が少ない。父親の平均年齢は45.2歳、母親の平均年齢は42.1歳、父親不在の家庭が5.6%あり、３世代家族が多い。父親の職業は会社員が多いが、農業・漁業も11.4% と多かった。母親はフルタイム・パートタイム・主婦の割合はほぼ等しかった。

表２～表６までは、飲酒関連問題に対する子どもと親の回答を比較した。

表２には飲酒頻度について、子どもと親の回答を比較した。この表で、親の男子とあるのは、男子中学生を持つ親という意味であり、親の女子も同様である。「飲まない」と回答した子どもは54% 、親は80% 、「年に１～２回飲む」と回答したのは子ども41% 、親は19% 、「月に１回以上飲む」と回答したのは子ども5.5%、親は1.4%であった。対象の中学生の飲酒はまだ低い水準にあるが、子どもの飲酒に対する親の過小評価が明らかであ

る。子どもの回答対親の回答で、全体、男子、女子共に有意差(p<0.001) がある。

表３には飲酒量についての子どもと親の回答の比較をした。コップに２杯以上飲んでいる子どもは5%しかいなかったが、親の評価では2%に過ぎなかった。子どもの回答対親の回答では全体、男子、女子共に有意差がある(p<0.001) 。

表４にはＱＦスケールによる子どもと親の回答を比較した。ＱＦスケールは未成年者の飲酒問題スケールであり、飲酒頻度と飲酒量をサブスケールとして点数化し、その合計点で子どもの飲酒状態を正常群、飲酒群、問題飲酒群の３つに分類する。対象群の飲酒状況はまだ低く、飲酒群は9.3%、問題飲酒群は0.1%しか存在しなかったが、親の認知は更に低く、飲酒群3.2%と子どもの回答の３分の１であった。子どもの回答対親の回答では全体、男子、女子共に有意差(p<0.005) が存在した。

表５に飲酒パートナーについての子どもの回答と親の回答を比較した。「家族・親戚と飲む」と回答したのは子ども41% 、親19% 、「友達と飲む」と回答したのは子ども11% 、親2%、「一人で飲む」と回答し他の子ども3%、親は0.5%であった。この表においても親の認知の低さが目立つ。

表６は、親の飲酒関連問題と示した。父親・母親の飲酒状態につての親の回答と子どもの回答はほぼ同じ水準であり、子どもの飲酒状態につての回答と対照的である。父親の51% は「よく飲む」と回答しているが、父親の19% は医師から節酒の勧告を受けたことがあると回答している。

表には示していないが、飲酒をめぐる親子関係で、「親から飲酒を勧められたことがある」と回答した生徒は28.5% 存在したが、「子どもに飲酒を勧めたことがある」と回答した親は19.4% しか存在しなかった。

表７・表８は、子どもの飲酒状態とその他の質問との相関を示している。中学生の飲酒状態をＱＦスケールによって分類した割合は表４に示したが、問題飲酒群が非常に少ないので飲酒群に含め、正常群と飲酒群との比較を示した。表７・表８から対象群における飲酒群の特徴が示されている。

飲酒群は、未成年者飲酒禁止法に対して、「飲む飲まないは個人の自由」と回答している者が多く(p<0.001) 、友達からの飲酒の誘いに対して「断れずに飲む」と回答した者が多く(p<0.001) 、親からの飲酒の誘いを受けたことがあると回答した生徒が多く(p<0.005) 、子どもに飲酒を勧めたことがあると回答した親が多く（全体、女子でp<0.005)存在していた。飲酒群では「父親がよく飲む」と回答した生徒が多かった（全体、男子でp<0.05) が、親自身の評価では差がなかった。家族関係において、飲酒群では、男子において父親不在の家庭が多く(p<0.001) 、女子においては父方祖父母が同居している者が少なく(p<0.05)、親に悩みごとの相談をしない者が多く(全体、女子でp<0.05) 、母親がフルタイムの仕事をしている者が多く(p<0.05)、節酒勧告を医師から受けている父親を持つ者が多かった（全体のみp<0.05) 。

Ｄ．考察

この研究はわが国で初めての未成年者の飲酒問題の長期追跡調査であり、今回は調査初年度の研究報告であるが、子どもの調査と親の調査を１対１で対応させて比較した研究としてもわが国で初めての研究である。したがって今回の報告は、中学生の飲酒状態と家庭状況との相関を明らかにした初めての調査報告でもある。

中学生に対する親子の同時調査から、子どもの飲酒に対する親の認知は低いことが明らかになっており、親が知らないところで子どもが飲んでいるという事態は中学生から発生している。また父親の19% が医師から節酒勧

告を受けていることも明らかになっており、親のアルコール問題の深刻さも伺える。

研究対象の中学生の飲酒状況は低い水準にある。例えば月に１回以上飲酒している者の割合は対象群の5.5%であったが、1996年の全国調査の中学生では18.5% であった。ＱＦスケールにおける飲酒群は対象群では9.3%、全国調査では20.4% 、問題飲酒群は対象群では0.1%、全国調査では2.9%であった。研究対象の中学生のこの飲酒水準の低さは、アルコール健康教育の後でのアンケートであったために、生徒たちが低めに回答したとも考えられる。

対象の中学生の飲酒水準の低さにもかかわらず、飲酒群はすでに一定の傾向を持っていると考えられる。飲酒群は、未成年者飲酒禁止法を意味がないと考えており、友達から飲酒の誘いを受けた時は断れないと考えており、親からの飲酒の誘いは高く、親とのコミュニケーションは低く、父親がアルコール問題を持っている割合は高いという特徴を持っていた。こうした特徴は、飲酒群が将来の問題飲酒群につながっていく可能性を示している。

今回の研究は親子の１対１の同時調査という特徴を持っていた。ここから親の子どもの飲酒に対する認知の低さも浮き彫りにすることができた。また、子どもの回答では飲酒群によく飲んでいる父親が多いという結果があり、一方では、親の回答ではよく飲んでる父親の割合は正常群でも飲酒群と差がないというような矛盾が発生している。これは飲酒群の子どもの父親は医師から節酒勧告を受けている者が多く、そのため父親本人としては節酒しているつもりがあり、子どもからはそう見えていないというズレが関係していると考えられる。

Ｅ．結論

未成年者の飲酒問題の長期追跡調査に着手し、初年度の親子同時調査結果をまとめた。調査から中学生の飲酒状態を親は正確に認知していないことが明らかになった。また中学生における飲酒群はまだすくない割合ではあったが、将来の問題飲酒群に移行していく一定の傾向が認められた。

Ｆ．研究発表

１．論文発表

なし

２．学会発表

なし

Ｇ．知的所有権の取得状況

１．特許取得

なし

２．実用新案登録

なし

３．その他

なし

表１　調査対象の中学生：第１年度（１９９７）の概況

調査契約人数	802 名	親の有効回答数	784 通
調査契約率	802/1238=64.8%	父親の平均年齢	45.2±4.6 歳
有効回答数（子ども）	797 通	母親の平均年齢	42.1±4.3 歳
調査参加率（子ども）	797/1238=64.4%	父親不在家庭	5.6%
平均年齢	13.5±0.8 歳	母親不在家庭	1.1%
男子	373 名	３世代家族	
女子	429 名	父方祖父の同居	13.8%
１年生	360 名	父方祖母の同居	21.9%
２年生	303 名	母方祖父の同居	4.9%
３年生	139 名	母方祖母の同居	10.0%
兄弟関係		父親の仕事	
兄のいる者	34.6%	会社員	41.8%
姉のいる者	31.2%	公務員	16.6%
弟のいる者	32.8%	農業・漁業	11.4%
妹のいる者	32.1%	工員	6.8%
		土木建築関係	5.8%
		自営業	5.1%
		母親の就労状況	
		フルタイムの仕事	27.4%
		パートタイムの仕事	34.4%
		専業主婦	38.2%

表２　飲酒頻度：子どもの回答と親の回答の比較

	子ども			親		
	全体 (N=797)	男子 (N=369)	女子 (N=428)	全体 (N=784)	男子 (N=369)	女子 (N=415)
飲まない	54.0(%)	51.8(%)	55.8(%)	79.8(%)	78.6(%)	81.0(%)
年に１～２回	40.5	42.8	38.6	18.8	19.8	17.8
月に１～２回	4.9	4.6	5.1	1.3	1.4	1.2
週に１回	0.5	0.8	0.2	0.1	0.3	0
週に２回以上	0.1	0	0.2	0	0	0

子どもの回答対親の回答：全体・男子・女子共に $p<0.001$.

表３　飲酒量：子どもの回答と親の回答との比較

	子ども			親		
	全体 (N=797)	男子 (N=369)	女子 (N=428)	全体 (N=783)	男子 (N=369)	女子 (N=414)
飲まない	45.0(%)	42.5(%)	47.2(%)	79.9(%)	78.6(%)	81.2(%)
コップに１杯以下	49.7	51.2	48.4	18.0	18.7	17.4
コップに２杯	4.0	4.1	4.0	1.5	1.6	1.4
コップに３～６杯	0.7	1.4	0.5	0.3	0.5	0
コップに６杯以上	0.4	0.8	0	0.3	0.5	0

子どもの回答対親の回答：全体・男子・女子共に $p<0.001$.

表４　ＱＦスケール：子どもの回答と親の回答との比較

	子ども			親		
	全体 (N=796)	男子 (N=369)	女子 (N=427)	全体 (N=783)	男子 (N=365)	女子 (N=408)
正常群	90.6(%)	89.9(%)	91.1(%)	96.8(%)	96.2(%)	97.3(%)
飲酒群	9.3	9.8	8.9	3.2	3.8	2.7
問題飲酒群	0.1	0.3	0	0	0	0

子どもの回答対親の回答：全体・女子 $P<0.001$，男子 $p<0.005$.

表５　飲酒パートナー：子どもの回答と親の回答との比較

	子ども			親		
	全体 (N=797)	男子 (N=369)	女子 (N=429)	全体 (N=781)	男子 (N=367)	女子 (N=414)
飲まない	52.5(%)	50.4(%)	54.3(%)	79.5(%)	77.4(%)	81.4(%)
家族・親戚	41.3	43.1	39.9	18.5	19.9	17.1
友達	10.6	12.0	9.3	2.1	3.0	1.2
一人	2.8	4.1	1.6	0.5	0.8	0.2

表６　親の飲酒関連問題：子どもの回答と親の回答との比較

	子ども			親		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子
父親の飲酒状態						
飲まない	18.1(%)	20.7(%)	15.8(%)	18.6(%)	20.0(%)	17.3(%)
時々飲む	29.2	28.2	30.1	26.6	24.9	28.1
よく飲む	48.3	47.8	49.4	50.9	51.1	50.8
その他	4.0	3.3	4.5	3.8	4.0	3.6
母親の飲酒状態						
飲まない	42.7	45.6	49.1	48.7	50.1	47.4
時々飲む	43.7	41.3	45.8	31.9	30.6	33.1
よく飲む	11.3	10.9	11.6	9.8	9.7	9.9
その他	2.4	2.2	2.6	9.6	9.5	9.6
医師からの節酒勧告の経験あり						
父親				19.0	18.0	19.9
節酒勧告の理由						
肝臓障害				7.6	8.7	6.7
胃腸疾患				1.2	1.2	1.3
高血圧				1.8	1.7	1.8
糖尿病				1.0	0.9	1.0
その他				2.6	1.7	3.4
母親				0.8	0.8	0.7

表７　対象のＱＦスケールによる正常群と飲酒群との比較（１）

	全体		男子		女子	
	正常群 (N=721)	飲酒群 (N=75)	正常群 (N=332)	飲酒群 (N=37)	正常群 (N=389)	飲酒群 (N=38)
未成年者飲酒禁止への意見[1]						
飲まない方がよい	75.4(%)	31.1(%)	75.0(%)	41.7(%)	75.7(%)	21.1(%)
少しならいい	13.7	39.2	13.3	22.2	14.0	55.3
個人の自由	11.0	29.8	11.8	36.1	10.4	23.7
友達から誘われた時[1]						
ことわる	65.6	25.7	66.3	27.8	65.1	23.7
断れず飲む	3.1	18.8	4.2	19.4	2.1	18.4
わからない	31.2	55.4	29.5	52.8	32.6	57.9
親から飲酒を勧められた経験あり[2]						
（子どもの回答）	5.8	55.4	25.2	47.2	26.3	63.2
親が飲酒を勧めた経験あり[3]						
（親の回答）	18.0	33.3	20.5	20.0	15.9	45.7
父親の飲酒状態（子どもの評価[4]						
飲まない	18.6	11.3	21.3	14.7	16.3	8.1
時々飲む	30.4	18.3	29.9	11.8	30.8	24.3
よく飲む	47.2	63.4	46.0	64.7	48.2	62.2
わからない	3.7	7.0	2.7	8.8	4.5	5.4
父親の飲酒状態（親の評価）						
飲まない	19.0	12.7	20.5	16.7	17.9	11.8
時々飲む	26.4	30.2	24.9	26.7	27.8	32.4
よく飲む	50.3	55.6	50.2	56.6	50.6	52.9
その他	4.0	1.6	4.4	0	3.7	2.9

1)正常群対飲酒群：全体・男子・女子共に $p<0.001$.

2)全体・女子 $p<0.001$, 男子 $p<0.005$.

3)全体 $p<0.005$, 男子 NS, 女子 $p<0.001$.

4)全体・男子 $p<0.05$, 女子 NS.

表８　対象のＱＦスケールによる正常群と飲酒群の比較（２）

	全体		男子		女子	
	正常群	飲酒群	正常群	飲酒群	正常群	飲酒群
学校生活について						
楽しい	65.1	65.8	61.3	69.4	68.4	62.2
どちらでもない	30.3	27.4	33.8	27.8	27.2	27.0
楽しくない	4.6	6.9	4.8	2.8	4.4	10.8
家族関係						
父親の不在[1]	5.1	9.7	3.6	16.7	6.4	2.8
母親の不在	1.1	1.4	0.9	2.9	1.3	0
兄がいる	34.4	36.2	35.5	37.1	33.4	24.3
姉がいる	30.8	34.8	26.3	37.1	34.7	34.3
父方祖父がいる[2]	14.6	7.3	13.5	14.3	15.6	0
父方祖母がいる[2]	22.5	17.4	21.4	25.7	23.5	8.6
親に悩みごとの相談[3]						
よくする	13.2	8.2	7.9	11.4	17.7	5.3
時にする	37.9	26.0	35.7	28.6	38.9	23.7
ほとんどしない	48.6	65.8	55.8	60.0	42.5	71.1
母親の仕事の有無[4]						
フルタイムの仕事	25.4	48.6	24.9	50.0	25.8	47.2
パートタイム	35.7	21.4	38.0	23.5	33.6	19.4
専業主婦	40.1	30.0	37.1	26.5	40.6	33.3
父親が医師から節酒[5]						
勧告を受けた経験あり	18.1	30.2	17.0	30.0	19.0	29.4

1) 正常群対飲酒群：全体 NS,　男子 $P<0.001$, 女子 NS.

2) 全体・男子 NS, 女子 $p<0.05$.

3) 全体 $p<0.05$,　男子 NS,　女子 $p<0.005$.

4) 全体 $p<0.001$, 男子 $p<0.01$,　女子 $p<0.05$.

5) 全体 $p<0.05$,　男子・女子 NS.

保護者の皆様へ
アンケート調査へのお願い

国立療養所久里浜病院
臨床研究部　鈴木健二

私は国立療養所久里浜病院で、思春期の情緒障害の治療を行っています。その関連で、三浦市の教育相談もやらせていただいております。私は若いアルコール依存症の治療も行っていますが、未成年者の飲酒の増加に関する調査も行っており、マスコミでも取り上げられています。

未成年者の飲酒の増加は、将来のアルコール問題の増加につながると予測されます。私は中学校や高校で飲酒を始めた子ども達が、大人になっていく中で、どのように飲酒して行くのか、どのようにアルコールによる障害が出てくるのか、などについて追跡調査を行い、予防対策を考えたいと考えました。

追跡調査の対象として、三浦市の中学生に対して調査を行うことになり、三浦市の教育委員会や各中学校も協力して頂けることになりました。

調査は、毎年１回飲酒に関するアンケートをお送りして、回答を返送して頂くことになります。調査に協力して頂ける御家庭におかれましては、以下に保護者名と住所などを御記入の上、保護者の方へのアンケートに回答して頂き、お子様のアンケートを同封して私宛に返送して下さい。二人のお子様が中学校に在学している時は、それぞれ別に記入して返送して下さい。

なお、調査への協力は任意でございます。プライバシーは厳重に守りますし、個人データを調査目的以外に使用することは致しません。調査へ協力頂いた御家庭（お子様）には、調査への協力のお礼として１回当たり千円の図書券をお送りします。

保護者名
住所
お子様の名前
お子様の性別　男　女
お子様の学校名　　中学校、　学年　　年、　年令　　才

次のアンケートにお答え下さい

1　御宅の家族構成をお聞きします。同居している人に○印と年令を記入して下さい

父親（　　才）　母親（　　才）　兄（　　人、　　才）
姉（　　人、　　才）　弟（　　人、　　才）
妹（　　人、　　才）　父方祖父（　　才）　父方祖母（　　才）
母方祖父（　　才）　母方祖母（　　才）　その他（　　才）

2　御父様の仕事についてお聞きします

1　仕事している
2　仕事していない

職業をお書き下さい（　　）

3　御母様の仕事についてお聞きします

1　フルタイムの仕事をしている
2　パートで仕事している
3　専業主婦

職業をお書き下さい（　　）

4　中学校に在籍しているお子様は、現在飲酒していますか？飲酒しているとすればどのくらいの頻度で飲酒していますか。

1　飲んでいない
2　年に１～２回飲酒している
3　月に１～２回飲酒している
4　週に１回飲酒している
5　週に２回以上飲酒している

5　中学校に在籍しているお子様は、飲酒しているとすれば１回当たり平均でどのくらいの量を飲んでいますか（ビール・チューハイとして）

1　飲んでいない
2　コップに１杯以下の少量
3　コップに２杯
4　コップに３～６杯
5　コップに６杯以上　　（アンケートは裏に続く）

6　中学校に在籍しているお子様は、誰と飲んでいますか（複数回答可）

1　飲んでいない
2　親や親戚の人達と飲んだ
3　友達と飲んだ
4　一人で飲んだ

7　中学校に在籍しているお子様は、どんな時に飲酒していますか（複数回答可）

1　飲まない
2　家族と食事の時
3　親類などが集まった時
4　お祭りの時
5　打ち上げ、クラス会などの時
6　友達の部屋で仲間と
7　カラオケＢＯＸで
8　海岸や公園で
9　自分の部屋で

8　未成年者の飲酒についてどうお考えですか

1　飲まない方がよい
2　少しなら飲んでもよい
3　飲む飲まないは個人の自由と思う

9　お酒から生じる病気やできごとで知っているものに○をつけて下さい（複数回答可）

1　肝臓が悪くなる
2　急性アルコール中毒
3　交通事故を起しやすい
4　生まれてくる赤ちゃんの障害
5　アルコール依存症になる
6　脳がちぢむ

１０　御両親は中学生のお子様にお酒をすすめたことはありますか

1　すすめたことはない
2　すすめたことがある

１１　御父様はお酒を飲みますか

1　飲まない
2　時々飲む（週に３回以下）
3　よく飲んでいる（週に４回以上）
4　その他

１２　御母様はお酒を飲みますか

1　飲まない
2　時々飲む（週に３回以下）
3　よく飲んでいる（週に４回以上）
4　その他

１３　御父様は医者や専門家からお酒を控えた方がよいと言われたことはありますか

1　ない
2　言われたことがある
（理由

１４　御母様は医者や専門家からお酒を控えた方がよいと言われたことはありますか

1　ない
2　言われたことがある
（理由

生徒のみなさんへのお願い

国立療養所久里浜病院
臨床研究部　鈴木健二

中学生の皆さんが、これから大人になっていくあいだに、どのようにお酒を飲むようになるのか、どのような意識で生活しているのかなどについて、これから年に１回アンケート調査することに協力して下さい。調査結果はアルコール問題の予防対策に活用します。調査は１０年以上続ける予定です。

アンケート調査に協力してくださる人は、下に住所と名前を書いて下さい。これから毎年その住所にアンケートを送ります。

アンケートに協力してくださった皆さん（アンケートを送り返してくださった皆さん）には、アンケートへの協力のお礼として、千円の図書券をお送りします。

住所
学校名　　中学校、　学年　　年生、　年令　　才
性別　（　男　女　）
氏名
保護者氏名

最初の調査としてこれからの質問に答えて下さい。答は番号に○印をつけて下さい。

1　あなたは今までにお酒を飲んだことがありますか
　1　飲んだことはない
　2　飲んだことはある

2　あなたはこの一年間に何回くらいお酒を飲んでいますか
　1　飲んでない
　2　年に１～２回
　3　月に１～２回
　4　週に１回くらい
　5　週に２回以上

3　あなたがお酒とわかっていて最初に飲んだのはいくつの時ですか
　1　飲んだことがない
　2　１０才以前
　3　１０才～１２才までの間
　4　１２才から後

4　あなたはこの１年間に誰とお酒を飲みましたか（○はいくつでもよい）
　1　飲まない
　2　親や家族やしんせきの人達と飲んだ
　3　友達と飲んだ
　4　一人で飲んだ

5　あなたはこの１年間にどんな時にお酒を飲みましたか（○はいくつでもよい）
　1　飲まない
　2　家族と食事の時
　3　しんせきなどが集まった時
　4　お祭りの時
　5　打ち上げ、クラス会などの時
　6　友達の部屋で仲間と
　7　カラオケＢＯＸに行った時
　8　海岸や公園で
　9　自分の部屋で

6　あなたはお酒を飲む時には１回にどのくらい飲みますか（ビール・チューハイなど）
　1　飲まない
　2　コップに１杯かそれ以下
　3　コップに２杯
　4　コップに３～６杯
　5　コップに６杯以上

（裏にもアンケートがあります）

7　未成年者の飲酒についてどう考えていますか
　1　飲まない方がよい
　2　少しなら飲んでもよい
　3　飲む飲まないは個人の自由だと思う

8　お酒を飲んで失敗したことがありますか（○はいくつでもよい）
　1　よって吐いた
　2　よってケンカをした
　3　よって、自分がしたことを覚えていないことがあった
　4　学校から叱られた
　5　親に叱られた
　6　事故やケンカで警察に捕まった

9　お酒から生じる病気やできごとで知っているものに○をつけて下さい（いくつでも）
　1　肝ぞうが悪くなる
　2　急性アルコール中毒
　3　交通事故を起こしやすい
　4　生まれてくる赤ちゃんのしょうがい
　5　アルコール依存症になる
　6　脳がちぢむ

１０　あなたは友達からお酒を飲むことを誘われた時はどうしますか
　1　ことわる
　2　ことわれずに飲んでしまう
　3　わからない

１１　あなたは親からお酒をすすめられたことはありますか
　1　すすめられたことはない
　2　すすめられたことがある

１２　あなたは学校でクラブ活動に参加していますか
　1　せっきょく的に参加している
　2　せっきょく的ではないが参加している
　3　参加していない

１３　学校は楽しいですか
　1　楽しい
　2　どちらとも言えない
　3　楽しくない

１４　あなたは勉強はしていますか
　1　全然していない
　2　少ししか勉強していない
　3　よく勉強していると思う

１５　この１か月間の平均で、あなたは１日の間にどのくらい家族と過ごしていますか
　1　ほとんど一緒に過ごしてない
　2　１０分以内
　3　１０分～３０分
　4　３０分～１時間
　5　１時間以上

１６　あなたは親に悩みごとを相談しますか
　1　よく相談する
　2　時には相談する
　3　ほとんど相談しない
　4　親はいない

１７　あなたのお父さんはお酒を飲みますか
　1　飲んでない
　2　時どき飲む
　3　よく飲んでいる
　4　わからない

１８　あなたのお母さんはお酒を飲みますか
　1　飲んでない
　2　時どき飲む
　3　よく飲んでいる
　4　わからない

御協力ありがとうございました